資料紹介

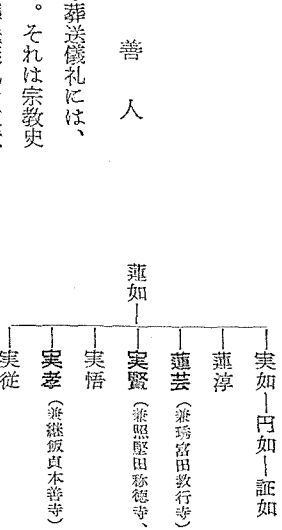
吉野飯貝本善寺の葬中陰記

石田善人

冠・婚・祭と共に人間一生の四大儀式と言われる葬送儀礼には、各地域によって現在かなりの差異があるようである。それは宗教史又は民俗学の上からも問題の一つになるであろう。葬送儀礼を文獻的に詳細に示すものに所謂葬中陰記がある。筆者は先年畿内一向一揆関係史料を奈良県吉野郡飯貝本善寺に採訪した際、同寺に多数の葬中陰記が所蔵されている事を知った。そのうち近世以前の次の六冊について簡単に紹介したい。

(一) 蓮能葬中陰記（蓮能葬記同在中陰次第）
(二) 蓮芸葬中陰記（葬中陰記蓮芸）
(三) 実賢葬中陰記（葬中陰之記）
(四) 妙宗葬中陰記（葬中陰記）
(五) 実孝葬中陰記（表題なし）
(六) 某葬中陰記断簡（表題なし）　（括弧内は原表題）

これらは何れも本善寺実孝及びその近親に関するものである。実孝は蓮如の第二十五子、初め諱を兼哉、法号を実玄と言ったが、後には兼継実孝と改めた。今、関係系図を便宜抄出すれば次の如くである。



真宗関係の葬中陰記としては蓮如上人御往生記・蓮能御往生記・実如上人闍維中陰録・顕宗主従終記などが既に真宗全書に収められ、蓮淳葬中陰記が八尾市宝寺顕証寺に所蔵される（真宗聖教現存目録第一輯）以外にも、空善記・私心記にもそれに該当する記事があるが、それらの多くが後世の写本であるのに対して本善寺所蔵の(二)・(三)・(四)・(六)の四冊は共に実孝自筆の原本であり、(一)は題字及び奥書が実孝の筆跡であって、真宗史上極めて貴重な史料である。実孝はこのように多くの葬中陰記を遺しているが、更に前掲の実如上人闍維中陰記の亡失した原本も大永五年実孝が録し、顕証寺所蔵の実従自筆の蓮淳葬中陰記も実は実孝の記録を実従が書写したものに他ならず、併せて彼が葬送儀礼に深い関心をもっていたことが判る。実悟記その他多くの記録を遺した実悟と、私心記という大部の日記を遺した実従との文筆家兄弟に挟まれた実孝も、多数の葬中陰記を遺したという点では特異な文筆家であったと言わねばならない。さて実孝が

葬送儀式に特別な関心を抱くようになった経緯は、㈠の蓮能葬記の成立の事情がこれを示している。その奥書によれば、永正十五年十月蓮能が山科本願寺で入滅した時に、葬儀の模様や中陰の大略を最初に記録したのは円如であって、後に実悟がその不備を補訂し、更にそれを実孝が借受けて書写したものであると言う。（尚、真宗全書本の蓮能御往生記は「本善寺実孝御本」を永正年中に実従が写したものを底本としている為に、実従の誤写から本善寺所蔵本が一行脱漏しているところがある。）実孝はこの時、兄実悟から葬中陰記の記録について何等かの教示を与えられて、それに触発されて葬中陰記の記録を始めたのではなかろうか。㈡・㈢が夫々葬儀の行われた場所、摂津富田教行寺・近江堅田称徳寺において毎日書継がれていることはその一つの徴証と考えられる。葬中陰記の形式が㈠㈡㈢と順次固定すると同時に、葬送儀礼も制度化されてゆく跡が認められるのは、本願寺の封建的定型化に相応ずる真宗風な葬儀の確立固定が、当時要請されていたという事情を意味するものである。

次にこれらの葬中陰記にあらわれた葬送儀礼慣行の内容は、現在畿内農村で行われているものと殆んど同様な点が多い。蓮如示寂後出家した蓮能は有髪の比丘尼であったが、死後改めて髪を剃落した。それについて実悟・実孝が「於京都不及見」る事と不審がったのに対し、実従が「是ハアル事也」と註記しているのは、多くの場合形式的に髪に剃刀を触れるだけであった証拠と考えられる。遺骸を奉じた輿を舁いで火屋の周囲を繞る習俗も現在と余り変らない。地域によって相異するものには、葬送・拾骨の際所持した白扇を捨て草鞋を脱捨てて裸足で帰る㈠の例、履替えの履物を用意しておき白扇・草鞋は集めて火屋で焼却する㈣の例、白扇だけ捨て草鞋は脱捨てない㈡㈢の例等がある。又興味ある事は棺蓋に書く名号の書式が極めて時宗風な点で、㈣の場合葬儀にヒジリが加っている事実と共に注意されねばなるまい。尚その他これ等の葬中陰記の記事から知られる事実には次の如きものがある。

真宗寺院に多く所蔵される七祖・法主・住持等の影像を描いた絵師として㈥では天満に住むエヤ新介、㈣ではトクラ（土蔵）因幡の名が見える。前者はその名前より絵業を渡世の糧とした町人の職人絵師であり、後者は天文日記・私心記にも記され、石山寺内町に住む町人（土蔵派の絵師）である。実孝の影像を描いた少輔（私心記）も亦類似の絵師であろう。次に門徒団の構成が推測されることである。飯貝門徒が吉野上市を中心に四囲の山間部に広汎に拡がり、その有力者が地侍的名主と油屋・薬屋などの行商的商人であったことや、安井道頓一族の河内久宝寺の安井甚左衛門尉・伝衛門尉が顕証寺の有力門徒であり、河内御厨の土豪御厨彦四郎が摂津富田教行寺と深い関係をもっていたことなどが副次的に知られるのである。葬中陰記という一見極めて特殊な史料も、案外な史料的価値を内蔵しているという点を指摘して紹介の筆をおきたい。